

明日香をさぐる

高松塚古墳壁画発見の感動

今回は高松塚古墳壁画が発見された経緯等について紹介したいと思います。

【世紀の発見】

明日香村教育委員会と檀原考古学研究所による高松塚古墳の調査が始まってからちょうど15日目

経過した昭和47年3月21日(火)は、前日の大雨がおさまったものの檜隈盆地は厚い雲に覆われていま

した。午前10時半頃から埋葬施設(石槨)の上部から調査が始まり、天

井石の輪郭や石槨の形状が明らかとなってきました。天井石南側

には盗掘により石が割られた痕跡も確認されたことから、その後の調

査は盗掘孔の検出に主眼がおかれ

ました。そして調査も順調に進み、盗掘孔に近付いたところで昼休み

となりました。昼休みは二班体制となり、網干善教先生と調査に参

加していた関西大学の学生二名が現場に残り、他の学生たちは別の場所で昼食をとりはじめました。

【盗掘孔の開封】

現場では網干先生と学生たちが時間を惜しんで盗掘孔の検出作業を続けていました。そしてついに盗掘孔の全貌が明らかとなり、人

ひとりごとがようやく通れる穴が開いたのは12時30分を少し過ぎた頃でした。

【現場に激震が走る】

作業をしていた網干先生は青ざめた表情で休憩中の学生にすぐ現場に戻るよう伝令を出しました。「現場がたいへんや」「ここでは何

も言われへんからすぐ現場に戻るように」と・・・。

学生たちは阪合小学校から文武天皇陵へ向かう坂道を無我夢中で駆けていきました。現場に集結した学生たちを前に網干先生は緊張した面持ちで話しはじめました。

網干先生はまず昼休み中に盗掘孔が完全に開口したこと、石槨の壁に絵が存在することを告げました。

学生たちは「絵?」「どんな絵やろ?」と口々に話しながら半信半疑で順番に盗掘孔の小さな穴に首を突っ込み、石槨内をのぞき込みました。

【1300年の時を超えて】

薄暗く冷やかな石槨内は盗掘孔からの土砂が堆積していました。そして学生たちの目に飛び込んで

きたのは暗闇に浮かび上がった極彩色の人物像でした。「夢ではない。」「何でこんな絵が飛鳥にあるんや。」明日香村にある小さな古墳

から中国や朝鮮半島にみられる極彩色壁画が1300年の時を超えて姿を現した瞬間です。極彩色壁

画の発見とその感動は瞬く間に全国へと広がり、「高松塚古墳」と「明

日香村」そして「飛鳥」の名前は全国区へと駆け上がっていきました。新聞紙上では第一面に考古学の記事が掲載され、日本で初めてカラー刷りが導入されるなど社会現象となりました。新聞報道を見た多くの国民が極彩色壁画に魅了され、飛鳥に思いを馳せていきました。

【日本考古学の幕開け】

特に女子群像は飛鳥の「顔」としてその後の「飛鳥ブーム」「考古学ブーム」を牽引することとなりました。そして当時活発に議論されていた飛鳥地域の保存は「明日香法」

の制定へと結実します。さらに考古学が市民権を得て、高度成長期の日本列島において市民による各地での文化財保護の活動へとつながっていきます。

本年3月21日には壁画が発見されてちょうど50周年を迎えます。世紀の発見とその感動は日本の文化財行政の在り方と市民による文化財保護の協同を導き出したまさに「日本考古学の幕開け」の日となりました。

(明日香村教育委員会文化財課)